

藍と綿が奏でる にしごおりの歴史

ふるさと文化伝承館博物館登録記念
「藍と綿が奏でるにしごおりの暮らし」展
藍と綿の歴史・文化・魅力が満載！5月25日まで

持続可能な綿の利用、どうする？

世界で綿製品の使用 現在の危機

- ① 過酷な労働・子どもの労働→人権
- ② 安い価格→貧困
- ③ 過剰な化学肥料と農薬→土壌汚染→生物多様性の危機
- ④ 大量の水→水資源枯渇



わたしたちにできることは？

便利で手軽 だけど・・・ 太平洋戦争時、一時的に綿栽培復活

大量生産・大量消費の時代

綿はほぼ外国産
藍は人工染料

昭和時代 養蚕・桑栽培へ
平成時代 果樹栽培

世界とつながる地域の時代

令和時代 2015年ふるさと文化伝承館で藍栽培・すくも作り

藍と綿、再び

それから約100年後の2015年以降、藍と綿の文化や歴史を伝えるためにふるさと文化伝承館で藍と綿の栽培をはじめ、現在では学校教育や地域のまちづくりなどに活用されています。大量の生産と消費の時代を経て、現在はそれぞれの土地の風土で生まれた手仕事に注目が集まり、土地に根ざした物語が見直されています。日本特有の発酵を活かした藍の魅力、暮らしを変えた綿の力。そしてこれからの私たちの暮らしを支える綿と染めの課題を考える種は、足元に眠っているようです。

写真／文／イラスト 文化財課



ふるさと の176 誇り

博しポート

藍と綿とSDGs

世界中がSDGs(※1)を掲げ持続可能な社会を模索している現在、「綿」は最も注目されている植物です。世界の多くの人々の暮らしを支える一方、消費量が多いためその栽培の過酷な環境における人権問題、農薬や肥料による土壌汚染、水資源の枯渇などが問題となつていきます。かつて西郡(にしごおり)は県内随一の綿とその染料となる藍の一大産地でした。今月は故郷で失われた藍と綿の記憶をたどりま。

藍染めと綿栽培の始まり

藍は飛鳥時代以前に伝来し、綿は室町時代に伝えられ本格的に栽培されたと言われます。甲斐国でも戦国時代に綿の栽培が始まり、藍染めを行う紺屋の座(※2)も形成されました。江戸時代に入ると綿栽培は換金作物として一気に拡大し、それまで主に麻を着ていた人々の生活を大きく変えることになりました。江戸時代中頃の西郡各村の様子を記した村明細帳でも、多くの村で綿栽培が行われ、農業の合間の女性の稼ぎとして、綿から糸を紡ぎ、布を織る仕事が見られる例は少ないですが、これは農業のかたわら紺屋を営む家があったためと考えられます。藍葉は江戸時代の中頃まで西郡では臨時の作物として数カ村で栽培される程度でした。この頃は乾燥させた藍葉を約3カ月間蔵の中で発酵させて作られた藍染めの原料「すくも」を玉状に加工した藍玉が、阿波(徳島県)や洗沢栄一の故郷でもある武州(埼玉県)から富士川舟運を利用して甲斐国にもたらされてきました。

江戸時代後期から明治時代

江戸時代後期頃になると、西郡でも藍栽培が本格化していきます。藍は水と肥料を多量に必要とする作物で、田方の村々のほか、原七郷でも換金作物として栽培されました。明治時代に入ると藍葉の生産量は旧落合村を中心に県内一を誇りました。また、旧川上村の浅野家は幕末からすくもを作る藍屋を始め、明治時代初期には国中地域全域から藍葉を買い集めてすくもを作り、藍玉に加工して、県内各地の紺屋へ販売していました。

※1 SDGs・・・2015年国連で採択された「持続可能な開発目標」。環境破壊や気候変動、資源不足、貧困などの問題を地球全体で取り組んでいくための17の目標。
 ※2 座・・・中世、朝廷・貴族・寺社などの保護を受け、座役を納める代わりに種々の特権を有した商工業者や芸能者の同業組合。
 (『大辞泉』より)